

かまはしの子ら

詩を書く村の小学生 斎藤哲夫

かまはしの子ら

詩を書く村の小学生 斎藤哲夫

柴田書店

かまはしの子ら

―詩を書く村の小学生―

© 1964

三八〇円

昭和三十九年七月十五日 印刷
昭和三十九年七月二十日 発行

著 者 斎藤 哲 夫

発行者 柴田 良 太

印刷者 中内 佐 光

発行所 柴 田 書 店

東京都文京区本郷三の二

電話 (八二) 七七九七

振替口座東京 四五一五

(印刷) 暁印刷・(製本) 協栄製本

乱丁・落丁本はお取り換えいたします。

(無断上演転載を禁ず)

目次

四月 1

きょうから三年生 かまはしの子 五時間
 の日が四日 学級委員の選挙 「先生ら、
 もうかなあ」 長いふんどし 「先生っ
 ちゃ、男と女の半まざり」 「うんこ百点、
 ばんざい」 四月の詩

五月 34

「女はませていんなあ」 「まったくだめ
 だなあ、おれらは」 百六十一羽の折り鶴
 すもう大会 「先生としとちまあ」
 「背中さすってやる、先生」 「教室見に
 来てみらし」 詩の時間 五月の詩

六月 64

「くちゅ、くちゅくちゅ、先生笑うぞ」
 「二人同点!! キスしましゅう」 「先生は
 おじょうさんでねえもの」 「給食くわね

っか、帰らん」 腹の虫が九匹 ーしつ
 れいですが、としいくつですかー 〃さ
 ようなら、うー〃 六月の詩

七月 83

ねずみだっかわいそうだ へそとかみな
 りの話 「先生、かんべんしねえぞ」 先
 生の腹巻 腹巻と詩 「夏休み、ばんざ
 い」 七月の詩

八月 108

大阪のおじさんが訪ねてくれた 〃みんな
 元気で二学期へ〃 「男だから、しかたあ
 んまい」 洋二のかそり踊り すばらしい
 本が二冊 「おれだっって書かれるわい」
 八月の詩

九月 129

先生、どうぞおはいりください 運動会
 ①はだか踊り ②ちゃっかり一等賞 ③長
 い作文 「好きなものと組む!!」 悪いふ
 ん囲気が…… 九月の詩

十月	156	学級会の賞状 「お、先生いいんじゃないか」 子どもたちのスーダラ節考 「早く先生になあれ」 二月の詩
「先生はからだが弱いから……」 「とうちゃん！」 「先生、うれしいか」 「人形げきを始めます」 晩翠賞のこと おれらしあわせだない」 十月の詩 「先生、		
十一月	180	三月
先生の顔は鬼の顔 「おねえさん大好き」 いも煮会 「がんばれ、豆詩人」 「先生 なんかいいねほろがよい」 十一月の詩		「みんなで掃除しよう」 試験の歌 かえるの卵 三年生さようなら学級会 三月の詩 三年生の終わりに 一枚文集——かまはしの子・五十三号——
十二月	199	はじめのことば
学級新聞 お話作り かぜで休んでいる友だちへ 学級楽しみ会 十二月の詩		斎藤哲夫
一月	224	あとがき
年の始めの文集づくり かまはしの子ら “わからないところはグループで” “おれたちだけでできるんだ” 一月の詩		菊地貞三
二月	242	

四月

きょうから三年生

昇降口の下駄箱の上の壁に、マジックインクで書かれた氏名一覧表がはってある。

「あ、おれ二組」

「おまえ、一組だわ」

「三組の先生だれかなあ」

そのうちに、男の子たちから「うわーい、うわーい」と押されて、泣きながら教室に入ってきた子もいる。

二年前の四月、おかあさんやおとうさんにつれられて、ひらかなで書かれた名前をさがしてもらった下駄箱の前で、三年生になった子どもたちは漢字で書かれた自分の名前をひとりで見つけ、ひとりで教室に入っていくのだ。

この子たちは三年生になった。そして今までの生まれた順にきめられていた学級からバラバラに別

れて新しい学級に入るのだ。新しい学級集団のなかで、子どもたちはまず適応し、自分を主張し、た
くさんの学習をしていかなければならない。

にこにこして教室に入ってくる子、がっかりして入ってくる子、きんちょうして入ってくる子、お
どおどして入ってくる子——恥ずかしがって顔をかくしたり、後むきになったりしてくる子——新し
い教室の中は、いくつかの小さな集団にわかれて話し合っているもの、それを黙って見つめているひ
とりぼっちのものと、いろいろなにわかれる。

この何もかも新しいなかで、担任教師ときめられたわたしもまた新しい心で子どもたちのなかに入
る。

「さ、それでは、これからごあいさつをしましょう」

すました顔で、おどけたように教壇に立つと、「ふ、ふ」「へへ」と小さな口をおさえて恥ずかしが
っている子どもたちの顔が見える。

「おかしいかな」

「おかしくありません」「うん、おかしくね」

「おかしいでエす」

「こら、こら。ハップ」

「えーと、三年一組です」

「あたりまえでエス」

「そうです。あたりまえのことです。一年生のとき、二年生のときと一組だった人は、また同じく斎藤哲夫、この人が先生です。でも、前から斎藤先生の組だった人は三分の一の人だけです。前に二組や三組にいた人も、今度新しく、わたしと勉強することになったんだよ。斎藤先生はうんとおっかなくて、けつっぱたきをして、みんなはわんわん泣いて、はあ学校に行かね」というんだそうです。」

「うそいってんだア」

「うそだぞ、あれ。おんもし（おもしろい）もの先生なんか」

「さあ、おもしろいかなあ」

「うん」

「いや、おもしろくないかもしれないよ。三年生の勉強はとってもむずかしくなってくるから、先生のいうことをよく聞いて勉強しないと、たいへんだね。九九なんか覚えられるかなあ。先生は心配なんです」

「だいじょうぶだ」

「そうかい。それでは、新しい教室で新しい友だちと、新しい先生といっしょに、いっしょうけんめい勉強しようね」

「はい」

「三年一組の友だちで、名まえがわからない人もいるね。早く組の人の顔と名前を覚えましょう」前に作っておいた出席簿を見ながら、ひとりひとりの子どもを教壇につれてきて、頭を両手でおさえて、学級全部の子に、名まえと部落を知らせる。「さあ、あしたから、にこにこして教室に来るんだ。これからは毎朝ひとりずつ教壇に出て、自分の部落と名前をいうことにしましょう」「うわぁ、やだなあ」「うん、かまね」

始業式があるので廊下に出たときは、もう子どもたちはそれぞれ背の順に並んでいる。三年生になった——たしかにそう思われる。わたしの話にもすばやく反応をする子たち、またひとりで並ぶこともできる子たち——一年生や二年生の、なんでもしてやらなければいけなかったときにくらべると、ほんとうにぐんと成長している。

始業式が終わって教室に帰ってくると一枚文集を渡したが、それにはこんなことを書いておいた。

“三年生になった”

三年一組です。

四十七人います。

男は二十五人、

女は二十二人、

新しい組で、

新しい気持ちで、

さあ、元気でやろう。

(わたしもがんばるぞ)

と、先生は考えています。

「がんばること」

1、一枚文集をつづける。―かまはしの子―

「ペンきょうのこと・あそびのことの作文」

「考えたこと・かんじたことの詩」

をのせる。

2、休み時間には外に出てあそぶ。―先生もできるだけ、

3、クラスの歌をきめて、朝とかえりはいつもうたう。

4、からだをなによりもたいせつにするように気をつける。

5、教室の中はいつもきれいにしておく。

6、おそうじは先生もいっしょにやる。

7、きゅうしよくのとうばんをたいせつにする。

8、**“青い窓”**には、毎月詩をおくる。

9、作文ノートで、書き方コンクールをする。

10、ラジオをきく。

11、げんとう・紙しばい・お話を見たりきいたりする。

12、クラスのしごとを一人一つずつする。

13、学級日記を毎日かわりばんこにつける。

14、このほか、クラスのもののがなかよくきちんとするためにはどうすればよいかをみんなできめる。

15、きめたことは実行する。

これを読んで説明して、子どもたちの胸をポンとたたかせて、約束をした。

そして、「うふ、恥ずかしくて……」とからだをねじったり、びっくりしたりするひとりひとりの

子どもたちと握手をして、一日目はさようならだ。

子どもたちの座席をきめること、掃除のグループをきめること・時間表を渡して学習の準備をさせること・四月の行事を知らせること・自己紹介をさせること・作文を書かせること・外に出て歌を歌うこと——と四月始めの学級は盛りだくさんの予定がある。ところが、ひとつの予定を実行しようと

すると、必ずといっていいぐらいに問題が出てくる。

「これから、みんなの机をちゃんときめます」

「先生、三年になったんだから男は男、女は女って並ばせらし」

「いやいや、男と女が仲良くするように、いっしょに並ぶ」

「やだァ、やだ」絶対ここ動かね」

子どもたちの異性意識が互いに反発するという発達段階まで成長してきたのだ。だから、ことばの上だけで男と女は仲良くしよう、などといっても効果がない。とりあえず、絶対動かない子に動いてもらって、だんだん別の面で男女が協力していけるようにするしかない。

掃除のグループは四つ。清掃受持ち区域は二カ所なので、二つのグループがさきにやり、順にひとつのグループが入りひとつのグループが抜けていく方法をとった。つまり一班と二班・二班と三班・三班と四班となるわけだ。ところが、最初に掃除にあたった子どもたちが、

「おれらばかり損しっちゃァ」

という。図表を作り、公平にまわることをしていねいに説明してやらなくてはいけない。

(注) “青い窓” は郡山市から出ている子どもの詩のリーフレットの名。これまでも子どもの作品を投稿させていた。

かまはしの子

一枚文集の「かまはしの子」を配布したら、休み時間に男の子たちが集まって話している。

「なにしてかまはしの子なんて名まえつけたんだべ」

「んだなあ、おもしろくねえなあ」

「おれら、かまはしの子どもでなんかねえものな」

「おれなんか、かあちゃんの子だ」

「うわァ」「うわァ」

と、声が大きくさわがしくなってくる。「釜橋の碑からとったんだよ」と一応は説明したのだが、ピンとこないらしい。始業式から三日がすぎて、女の子たちはわたしの机のところにできて話をするが、男の子たちはまだようすをみているのだ。それに女の子たちが集まっているところには、そう簡単にはこられないので、わたしに聞こえるように、わざと大声で話しているのだ。

そこで次の時間に、指導案にはないけれど、釜橋の碑のところに子どもたちをつれていくことにした。そして、「かまはしの子」という名まえを文集につけた理由を話してやることにした。

「外に出て歌を歌ってこよう」

というと、昭は重いアコーデオンをだきあげながら外に出る。ほかの男の子たちも、「いいぞ、いい

ぞ。山遊びいいぞ」

と手をたたきながら後につづく。「山に行く」とわかると、子どもたちは校庭に出ても、きちんと男女一列ずつに並んで待っている。

「釜橋の碑に行きます」

「うん、いい」

と、うれしそうだ。そして、一年生の教室のわきを通ると、とたんに、

「一年坊主、くそ坊主」

と、声をそろえて叫ぶ。一年生が見ていると得意で、三年生になったことを示したいのだ。学校から、歩いて三分も行くと、道のわきに「古蹟釜橋の碑」がある。

「これが有名な釜橋の碑です」

「有名なあ」「有名でなんかねえわい」

あまえて、わざと反対のことをいう子や、まじめに考えてしまう子やいろいろの子がいる。釜橋の碑は高さが一メートル五十センチ、幅が五十センチぐらいで、下に石垣が積んである。道路から高い畑に入っているのです、下からみるとなかなかよい石碑なのだ。四列に並んでいる子どもたちの前に立って、話をする。

「昔、昔、ずっと昔。この辺に家なんかは少ししかなくて、草や大きな杉の木がたくさんはえてい

たころの、ずっと昔の話です。八幡太郎義家というさむらいの大将が、たくさんのけらいといっしょにこの辺にきたのだそうです。向かいの山のところで『ひとつ今夜はここにとまろう』というので、みんなは休んだのです。みんなが休むと、ごはんをつくる係の人が、向こうの丘から、この丘に来て大きな釜をしつけて、ごはんをたいたのだそうです。ごはんをたいたところを釜場というので、ここがその釜場になったんだね。ところが、むこうの丘からこちらの丘に来るには、ちょうど真中を流れている矢武川を渡らないと来られない。そこで矢武川には橋をつくったのだそうです。だから、釜場と橋をつくったというので釜橋という名まえができたのです。

どうして、石碑を建てたか、というと、大きな釜でごはんをたいたところを記念にして、これからはこの村もいつも景気よくごはんをたくことができるようになるといいとみんなが思ったからです。釜子小学校の釜子は前のみんなの村の名まえだったね。釜子村という名まえは、この釜橋というところからでたんだよ。それで、みんなは釜子の子どもたちだから、かまはしの子という文集の名まえをつけてもいいと思ったんです」

「ふーん。そうかあ」

「それに、校歌にも、『夢の釜橋かけようよ』っていう歌詞があるでしょう。みんなが大きくなったとき、みんなの夢がほんとうの夢になるといいなあって先生は思っているもの。そう祈って一枚文集作るもの。かまはしの子っていう名まえでいいでしょう」

「うん。んじや、いいわい」

と、いうことになった。

釜橋の碑をみんなでさわり、さわりながら大きな声で校歌を歌って帰ってきた。

五時間の日が四日

「うわあ、絶対おもしろくねえ、これ」

「おまえ、なんだあ」

「見てみろ、これ。三年になったら、五時間の日四日もあんだぞ」

「うひゃー。やだなあ」

「三年になんかなんねっかいかった（ならなきゃよかった）」

時間割表を渡したのだ。わたしが説明をする前に、もうこんな会話が出ている。二年生のときは、一週間のうち五時間の日が二日だったのに、それが二日ふえて四日になって、四時間の日は木曜日と土曜日の二日だけになってしまったのだ。道徳の時間が入ってきたり、最低基準時間を割らないよう完全授業をするようにといわれたりするので、時間数がぐんと多くなる。給食を食べてからの五時間

目が子どもたちにはきつい負担なのだ。五時間目には、体育とか音楽とか図工などの子どもの動きのある教科をもってくるのだが、それでもグッタリするらしい。しかし、三年生なんだという自覚をもたせなければいけない。

「五時間の日が四日あるね。三年生になったから、勉強することがたくさんあるので、それだけ時間がふえたんです」

「うわぁー」

「五時間の日が二日だけだったらいいなあ、と思う人？」

「はぁーい」

元気のよい声で、大部分の子が手をあげる。

「先生もそうだったらいいと思うなあ。でもそうしたら、三年生の勉強ができないんだなあ」

「勉強できなくてもいい」

そこで、すましていってやる。

「どうしても二日の方がよいお方は、残念でございますが二年生の教室が待っております」

「うわ」「いやでえす」「待ってなんかいませえん」

「あれ、二年生にはなりたくないんですか」

「なりたくありません」